校長の生徒・先生応援日記　Vol.10

学びの匂い

選手を支える仲間の存在こそが誇り

令和５年11月５日の日曜、私は、秋晴れの中、サッカー部の応援に「味の素フィールド西が丘」へ向かいました。高田馬場から山手線に乗り換えた時、ふと、昨年のサッカーワールドカップで日本がドイツに勝利した翌朝を思い出しました。当時私は、勤務校が遠かったため、朝６時頃には渋谷に停車する山手線の中にいましたが、「電車から離れるように」とアナウンスする駅員の声に導かれ、外へ目を向けてみました。すると、日本の勝利に興奮したサポーターがホームいっぱいに溢れていました。私は、思わず五反田の駅で「三苫の１ミリ」と大きく写真が掲載された新聞を購入してしまいました。読み始めた時のことです。片隅に日本の勝利を陰で支える人たちの記事を見つけました。

一つは、今までのワールドカップがＪリーグと同時期の夏開催だったため、選手のコンディションがとても維持しやすい環境にあったが、ヨーロッパリーグと重なる秋冬開催へ変更されたことにより、強豪国が有利となるだけではなく、日本の選手が疲労を蓄積させたまま試合に臨むこととなった。そこで日本は専門のドクターを同行させ、選手が感じない疲労を血液の値から読み取り、健康状態を適切に管理した。

もう一つは、スパイクシューズの開発秘話のこと。計測上ではなく、選手一人一人が感じるフィット感を追求した試行錯誤の連続でどんな体制でもボールをコントロールできる素足のようなシューズを完成させたこと、この二つのエピソードが紹介されていました。

私は、表舞台で活躍する選手を支える人たちの努力が日本の奇跡的な勝利へと導いたことをあらためて知ることで、遠く離れた日本から届くはずもない大声で応援していた若者たちの興奮も、支える力の一つなんだろうと、その気持ちを少し理解することができました。

さて、会場に到着した私は、選手を支える一人として、祈るような思いで選手を鼓舞しました。観覧席には、メガホン片手に声援を送るサッカー部の仲間、卒業生、クラスメイト、保護者の方々に、チアダンス部の演出や吹奏楽部の演奏も加わり、単なる人数の足し算に留まらない相乗効果となって高まっていく大成高校の真のチーム力が会場全体を包み込んでいました。

部活動は、限られた時間や場所、指導の中で、自らを成長させる努力の連続です。自己の力が高まれば、指導者や仲間との考え方に違いも出てくることでしょう。特に、思うような成果が出ないスランプは、切磋琢磨する仲間の支えさえも疑問に感じる時があります。思い起こすと私も高校生の時、部活動で周囲と意見が合わず、何を、誰を、どこを、信じればいいのか悩み苦しんだ経験があります。私が自分の考えを固持し続けた結果、チームの気運までも失わせてしまいました。

しかし、孤立する私に、最後まで声をかけ続けてくれたのも仲間や顧問の先生でした。私はこの経験から、スポーツも文化・芸術も、個人や集団を問わず、チームの力がとても大切であること、そして仲間の意思を尊重しなければならない時が必ずあり、これこそが自分自身の成長となることを知りました。その後、私は、支えてくれる仲間の存在が、強い絆で結ばれていくのを感じるとともに仲間を思う気持ちが誇りへと変わっていくことに気付きました。

試合は、最後まで気を抜けない手に汗握る展開となりました。タイムアップの笛が鳴るまで、ピッチに立つ選手と観覧席で応援する生徒との一体感が仲間を大切にする誇りとなり、学びの匂いとなって秋晴れの空高く舞い上がっていました。試合終了後、観覧席に向かって深々と頭を下げる選手、顧問、監督、コーチの悔しさが、いつか大きな大輪を咲かる力になると期待し、私は会場を後にしました。

令和５年１１月